

賞名	作品	筆名	読者賞投票者による評 (本選選者からの講評を得た本選者評も付記)
読者大賞1名	携帯の声折りたたむ夜寒かな	武船主明	*冬の公園で、携帯をおりたんでいる様子。ふっきた訳ではないが「まあ、良いか!」と、明日頑張ろうという感じの光景が浮かびました。 *携帯を折りたたむのではなく、声を折りたたむ、が良いです。まだ寝ている声があるのに、折りたたむとは?と、いろいろ想像が膨らみます! 恋に離れたか、家族か、仕事関係か? 夜寒が身に沁みます。 *一人住みの叔母からの電話を思い浮かべました。「元気してるか?」から始まる会話が終わると、叔母はガラケーの携帯を折りたたみ、誰も居ない一軒家の夜寒の現実に戻ります。「声折りたたむ」で淋しさはおさらです。
読者準大賞5名	一トンの実梅を漬けて姪れり	巖葉 峰	*終るとい一大事、梅農家に嫁がれたのでしょうか、青々とした一トンの実梅の歌詞との取り合わせが妙にはまります。また、漬けて姪る、に女性の逞しさも感じました。 *一トンの実梅をせっせと漬けている毎日? 実梅の实のように実はお腹にも新しい命が宿りはじめていた。そのことを実上手く表現されている句。
読者準大賞	夕立のみな側溝へ吸はれゆく	関 雅己	*衝突かあまり喜ばしくない夕立という事象も、失われてしまう情景を思い浮かべると疎ましい気持ちより優れみが湧いてしまう。好ましくない人でもいつか死んでしまおうと思うと惜しむような気持ちになれるのに似ている。「吸はれゆく」で終わっているが、読んだ者の胸には読む前には無かった悲愴が湧き上がる仕様になっている。見たままを写した「流れゆく」と「吸はれゆく」では印象が全く違う。万事を夢も跡み手の内からこぼれ出たのである。「吸はれゆく」により、名詞性という後述となっている。 *夕立が降っているシーンではなく、また夕立に濡れているシーンではなく、夕立の水がどうなるのかを想像した視点を興味深く思った。客観的事実ではあるが、そこにもものあわれをかんじることもできる。
読者準大賞	鋭角に割る板チョコ寒の入	須坂大寒	*チョコレートは気温の影響を受けて、ある一定温度以上になると柔らかくなり、一方気温下がると固くなり割づらくすなる。正月休みも明けようとする気候では、固くなった板チョコを割ろうとすると、パリッと音を立て、割れることは割れるが、きれいには割れない。今日、割れた一片は鋭い角度をもっている。寒の入りの寒さを板チョコの割れ方に見出し、それを「鋭角」と表現した、その着眼点が面白い。チョコレートの割れ方に似合った、ばきばきとした語感も楽しい。 *板チョコを割る音が、寒さの厳しい時期の始まりの合図のように響く。思い通りに割れなかった板チョコ。碎む指の指に寄立が見える。今日は何事もうまくいかない日になるのではないか、などとネガティブに考えすぎてしまう。でも、きっと板チョコは甘く、気持ちを落ち着かせてくれることだろう。緊張と弛緩の一句。
読者準大賞	窓拭きの冬青空の命綱	曾根新五郎	*ビジネス街にある中層ビルなどでは、外側からの窓拭きが定期的に行われる。作者はたまたま、それに出くわしたのだろう。見上げると、屋上から垂らした命綱一本を頼りに体を左右に揺らして、右から左へ、左から右へと窓を拭いていく。折しも、曇つない冬青空のもと、びんと張った命綱をさらに降ろして次の階へと移っていく。冬の寒さの中に、ある種の緊張感をも感じさせる。これは、「冬青空」を中七に置いたことで、広い空と一本の命綱との緊張関係を生み出しているのだろう。 *高層ビルの窓拭きの都会の景を上手に表現していると思います。命綱で、都会で生きる人々の危うさも感じられました。
読者準大賞	踊の輪踊らぬ人の輪が囲む	中西 宏	*輪になって盆踊りを踊っているのは生きている人たち。それを囲んで見ているのは亡くなった方たち。とみると、なんだか愉快な気分になってくる一句。 *素知らぬ顔のその他大勢、対岸の火車を眺めるだけ。そんな性みないものを「踊らぬ人の輪」という表現に感じられた。
読者賞候補作106名	ひと風呂を浴びて一人よ月見豆	たなか 礼	*さっぱりひと風呂浴びて、一人を癒している気さか自由さを感じる。自然と共に暮らして楽しんでいる姿。月見豆は賞味できさやがだが、とても量かで寛裕な時間を味わっている。少しの寂しさはあるのかも知れない。でもきれいな月と共に在る自分を解放感とともに肯定している。
読者賞候補作	どんぐりの落ちて下校の列乱す	栗井昭子	*果樹園の下校の列に突然、どんぐりの実が落ちて来た。今まで整然と並んでいた子供たちが、どんぐりを拾おうとして列がバラバラになった。まるで映画のワンシーンを見ているかのような臨場感のある一句である。
読者賞候補作	考への尽きたる蘆の枯れゆけり	伊藤 員	*これは詠論のある俳句だと思います。考える蘆といったのはバスカルだけ、自分はすでに考えすらも尽きてしまっていて枯れてしまった蘆だと書いているかのように。冬に川に行くと言が枯れています。それを見て、ふと自分のことを思ってしまったという句の印象でした。
読者賞候補作	駅員の差す指ますぐ今朝の秋	伊藤孝一	*駅でよく見る光景ですが「指ますぐ」は、丁寧に読んでいると思います。
読者賞候補作	水溜に打ち込むハーケン蹴せり	益子さとし	*ロッククライミングの専門の道具であるハーケンが今まさに打ち込まれた。静まり返った山の中に強い金属音が響き、頭となってクライマーと、それを下方の岩場から見てであろう作者に跳ね返ってきた。あるいは、作者自身がクライマーなのだろうか。静寂の中の金属音と岩の響きの緊張感が伝わってくる。一か所気になったのは、アイスクライミングの道具としては正確にはアイスハーケンなのではないか。
読者賞候補作	万華鏡回して春に組み替える	遠藤昭三	*万華鏡のキラキラ感に、バツと切り替わったことによる高揚感が伝わってくる。万華鏡を回して春にしているのだという楽しさがあるおもしろい。「組み替える」という下五がカチツという音と共に景色が世界が一瞬にして変わるマジックのようで気持ちがいい。
読者賞候補作	散らずして老いゆけばかり紫陽花は	岡田春人	*紫陽花をこのように扱えた句を初めて見ました。きっと、紫陽花をずっと見続けていたのだと思います。「老いゆけば」という擬人化に、我が事のように、共感しました。
読者賞候補作	秋淋しダリの時計にある砂漠	河合 典	*ダリの時計といえは「記憶の固執」という趣です。この鐘の音でぐにやりととまった時計はむしろ夏の暑い感じがするように思っていました。でも、よく見ると誰もいなくて時計だけあるというのはどこか消えてしまったか。強烈な孤独感が見えます。それを「秋淋し」としたところに面白さがあると感じます。
読者賞候補作	笑ふだけ笑ひ合ひたり葎飯	角田 山樹子	*笑うと葎の組み合わせは趣きのある一語連想してドキッとしますが、たのしい食卓が微笑ましい。
読者賞候補作	八月のとぎれた父の日記帳	鎌倉道彦	*毎日日記をつけてお父様はおそらく8月に亡くなったのでしょうか。当り前の日常がとぎれた瞬間がとてつもなく寂しく、また愛おしく感じられた筆者の気持ちが伝わってくるステキな句だと思います。
読者賞候補作	十月や絵皿に落とす空のいろ	亀田紀代子	*淡々と、あくまでも淡々と秋を謳っている。
読者賞候補作	ほめるでも叱るでもなく母涼し	菊地十音	*いつでも冷静で、どーんと構えている母親像が浮かびます。現代版の理想の肝玉母さんで、こんな感じでしょうか。
読者賞候補作	国境の戦なき空鳥渡る	菊池 熱海	*鳥にとっては国境もなく、国境の争いごととも関係がありません。自由な鳥を羨ましく思う気持ちが見えます。
読者賞候補作	金木屋エブロン紐びんと干す	宮崎 玲子	*楽しい俳句ですね。洗濯物を干す時の楽しい気持ちが表現されていてかわいい俳句になりました。
読者賞候補作	つゆ草は一日の青天の青	金子 俊彦	*つゆ草はわずかに一日の命を、深く深く青色をまといて咲きます。それは天から授けられたかのような清らかで美しい青。つゆ草の青色をこれ以上願える言葉はないではないでしょうか。素敵なお一句です。
読者賞候補作	志貴生駒二上金剛大花野	栗田秀子	*全て漢字のため字面に迫力がある。明確な山々に開かれた奈良盆地に、至るところに秋の花々が点綴している様子が浮かんでくる。しかし、この句の一番の良さは響きにあると思った。シキイコマジウコウゴオオオハナノ、リズムが最高に気持ちいい。料理に何度も口ずさむことがあった。自然に口ずさむような句は良い句に違いないと確信し、この句を選んだ。
読者賞候補作	耳遠き夫には聞こゆ秋の声	原 穂子	*老い衰えてからの夫婦の心霊かな暮らしぶりが伝わってくる。
読者賞候補作	教室は素描の時間ラフランス	吉田 几城	*真っ先に、芸術大学の教室を思い浮かべました。絵具のにおいや汚れた床。色や形がまちまちのラフランスを夢中でデッサンしている学生たち。参観している人物になってこの句を鑑賞しました。
読者賞候補作	生きるとは戦うことよ輝しぐれ	高瀬慈雨	*生きていると、良いことも悪いことも色々ある。それが人生! 輝も、短い生涯が必死に鳴いて生きている。輝しぐれが、人の人生と重なって感じられたステキな句だと思います。
読者賞候補作	一笛に闇の深まる薪能	佐藤ます子	*今、まさに薪能が始まろうとしているその瞬間の闇を切り取っている。薪火が焚かれ能舞台と能楽師を浮かび上がらせている静寂な闇に「一笛」が響く。能楽師のつま先がすぐに運びだされる。その瞬間に夜の闇を一層深く感じる。
読者賞候補作	親の名をそのままつけて飼う仔猫	細野やすい	*楽しい句ですね。その名前の親は苦役でしょうね。
読者賞候補作	春うらら浦賀の渡船客一人	三浦秋子	*「うらら」と「浦賀」で韻を踏んでみせたのち、一人の船上という心許ない情景に落ち着く。帰郷か一人旅の途中という扱え方も出来るが、コロナウイルスの影響により「渡船客一人」という扱え方も出来る。リズムカで一見陽気な冒険との対比により、寂しさが一層際立っている点といい、さりげなく時事まで取り入れている可能性といい、大変優れた句である。
読者賞候補作	昼寝覚め生命線を見つめをり	三宅忠昭	*昼寝から覚めた時このような光景、心当たりがあります。上手い!
読者賞候補作	君逝くや秋空の底抜けしごと	三輪 遼	*どんなに隠しても、隠しきれない後ろ姿に言葉が失う。作者の後ろ姿が見えるようです。
読者賞候補作	紙漉や水にもありぬ表裏	山口純子	*私自身は、紙漉を実際に見たことがないが、報道などの様子から、確かに「水に表裏がある」という感じられる場面があった。その点を大胆に言い切ったことで、紙漉における一つの工程をあざやかに捉えた一句となっている。
読者賞候補作	少女乗せスケボー夏を飛ばせごとし	志田千恵	*少女を乗せたスケボーはそのまま、勢よく坂を飛び、空に舞い、夏を飛んだ。スケボーは少女を乗せて、少女は背中夏の光を乗せて、夏を飛ばせ少女とスケボーを、地上の私達にだけ伏すように見つめるのみ。そんな少女とスケボーと夏の世界に、圧倒された。作者の描いた夏の空は、きっとどこまでも青い。青い空を飛ばせ少女とスケボーは、夏の光を背負いながら高く舞い、高く高く飛んでいくであろう。その先にあるのは紛れもなく、夏なのだ。
読者賞候補作	栗剝くに上手下手あり姉妹	藤野登美子	*確かに実感。おしゃべりをしながら栗を剥いている光景に家族愛を感じました。
読者賞候補作	我が影を入れて片蔭膨らめる	守屋まち	*暑い盛りには、どんなに狭い陰でも陰を求めて歩きたい。暑くても歩かなければならないのであるから、用事があっての事だろう。尚更である。自身の影が陰を膨らませる程の狭い陰を歩く。そんな暑さが伝わってくる一句。
読者賞候補作	白まんじゆしやげならば旅立つ朝に欲し	野野ゆう	*栗と我が儘を並列にして、思い過ぎない塩梅が良い。旅とは死ぬこと。荷物もたたくんばならない。
読者賞候補作	老いといふ足枷手枷空つ風	野野花菜	*歳を重ねると周りからも足枷とられ、また、自分自身も何かと身の回りに不自由なことが多くなる。裏は足から始まり、手許へと進行してゆくようだ。口枷はどっこいそうではない。むしろ逆者になって後押しすることが多い。空へ風に吹かれるとついつい愚痴も出る。老骨が体力だけは自身があり、そんな弱気を吹き飛ばし愚痴野郎でいたいものだ。
読者賞候補作	茹で上げの枝豆扇ぐ社内報	小だいふく	*その辺にあった社内報で扇ぐ様子が、何気ない日常を切り取って良いなあと思いました。

読者候補補作	嘘や一瞬にして蟬の黙	小松久美子	*音の連鎖が途絶える。いのちが命の中に取り込まれ、今生の連鎖は続くのだと解釈しました。
読者候補補作	秋高し「考える人」立ち上がる	小泉まり子	*「考える人」の像も立ち上がってしまうほど、秋の空が高く澄みきっている響き想像しました。
読者候補補作	水打つてこの町の香を立てにけり	松永典子	*水を打つことで、香りたつものに気づいた感性が素晴らしい。嗅覚は嗅かきききと呼びます。そして向にはそれぞれに独特の香りがあるものだ。水を打つことで、地に溜まった香りの粒が跳ね出されるような、そんな想像を読み手に与える。
読者候補補作	耳の穴指をあたたため読む点字（点字）	松岡 弘	*眼の御不自由な方が点字を読むときに指を暖めるのを知りませんでした。それも耳の穴で、一文字もおとせない大切な文脈のですね。この句は無季になるのかもしれませんが「寒い空間（冬）が感じられ頂きました。この方にしか詠めない秀句ですね。
読者候補補作	草の花「あなたらしく」と言われても	森中こより	*「あなたらしく」がよいです。改めて言われると、いろいろな想いが浮かんでくる。口語が効いてます。いつか言われたような記憶が蘇り、共感しました。
読者候補補作	銀河近き池塘明けゆく一波紋	深海龍夫	*星満ちてあろうか。風があるいは鳥か。何かが作り出した小さな波紋が伝播し、やがて一面に広がり沼の縁を知らせる。整々と明けてゆく沼に遠と澄み切った空気を満たす一波紋の臨場感あふれる一句。
読者候補補作	六疊にをさまり切らぬ残暑かな	須坂大雅	*部屋の中に収まり切らない暑さ。六疊にとしたところに書き目に暮らしに安下留のようなノスタルジーを感じる。
読者候補補作	冬木立ハスキー犬は風の如	水越晴子	*情景が浮かびました
読者候補補作	検温機自動照準原爆忌	西村 泉	*冒頭で最新の時事を扱い、原爆忌を振り返って終わるという巧みな句。同じ照準を合わせるものでも、平和のためのものである検温機と爆弾を落とした戦闘機では全然違う。命を助ける事も出来れば反対に命を減らす事さえ出来てしまう、文明への畏怖と人の持つ力の使いどころについて考えさせられる。原爆が用いられた戦争はとくに終わったが現代でも争いは絶えず、笑ってばかりではいけない。抗う勇気が出ず、愛想いを浮かべて悪しき出来事の実験を通り過ぎようとした所で怒りや悲しみに足を止めている人と目が合ったかのような、はっとしたような心地させられる。作中に「照準」とあるが、この句自体に照準を向けられたかのような心地がした。
読者候補補作	冬の朝空に歪みのなかりけり	西田むつ子	*冬の晴れた日のどこまでも澄んだ空を背景に表現している。歪みがないと言いつつどこにも歪みを感じさせ、歪みがない歪みを感じさせる。言葉に無駄がなく、清々としたいい句だと思った。
読者候補補作	親指と小指で測り編むセーター	西澤登香	*編み物をする時何気なくやっている事を上手く俳句にしましたね。
読者候補補作	ゆるやかに今日を閉ぢたる花芙蓉	川口愛子	*その日一日を咲ききって閉じる芙蓉の花。「ゆるやかに今日を閉じる」という表現から、ゆったりと満ち足りた充足感のようなものが感じられて秀逸である。こんなふうに一生を閉じられたら、とさえ思う。
読者候補補作	タクト上げ少年の夏極まりぬ	川出泰子	*一瞬の緊張感、熱感が凝縮されている。「タクト上げ」という経済効率のよい言葉で、彼を見つめる楽団の張り詰めた顔、観客の息をのむ視線、やがて始まる楽曲まで聴こえてきそう。少年がまたいい。プロではない、瑞々しさが伝わってくる。
読者候補補作	連れ歩く影も見送る風の盆	曹根新五郎	*ふと寂しさを感じる句
読者候補補作	新しき口紅の角春立ちぬ	相澤 美穂	*つんと艶かしく光る口紅の角。このコロナ禍で紅をさすことも新しい口紅を買う事もなくなった女性は、私も含めて多いのではないだろうか。この句は、女性なら感じたことがあるであろう新しい口紅のつやめく角に心が引き立つ思い、そんな事を思い出させてくれた。コロナなんかは負けていられないぞと思わせてくれた一句。
読者候補補作	虫時雨一歩で止んで闇となり	竹澤平和吉	*虫時雨って、「音」じゃないですか。で、歩きだしたら、その「音」がピタッと止まる。経験よくわかる。で、音が止んだのだから「静寂」（音の世界）が来るはずなのに、訪れたのは闇。でも実感としてよくわかる。虫の音が一瞬で消えたら、どつと闇が押し寄せてきて僕にだけあった感覚。誰かだ私まで暗闇に取り残されたような感覚に憂われて震えた。
読者候補補作	斑鳩の深き眠りに月渡る	茶菜斎	*斑鳩とは法隆寺近く、聖徳太子一族が拠点としていた土地のこと。今は睡眠についているこの土地、月が静かに輝くと照らしている静謐な空間が目につくように、好きな句です。
読者候補補作	語り部の黙の語りぬ原爆忌	塚本治彦	*言葉でできると伝えることの大切さを一番わかっている語り部の心に、思いが溢れて閉じてしまう。その姿にこそ伝わる重さがあります。
読者候補補作	研ぐ鎌に匂ふ昭和や秋夕焼	堤 幸彦	*鎌を研ぐにおいを感じては、匂いと表現したことに主人公の思いがあるのだろう。鎌と昭和、秋夕焼の組み合わせを組み合わせることで、かつての農家の風情なども想像させる。なつかしさに駆られる一句だ。
読者候補補作	鶏頭花五人の親を結びけり	添田勝夫	*遠く親を演じきったとき、既に過ぎ去った半生を振り返る。綺麗だけでは別途出来ない領域の確かな手応えを感じた。
読者候補補作	オーデコロンつけて面接官になり	田尻 龍一郎	*面接官になるなら、人を差別しなければならぬ。自分の手で人の運命を左右しなければならぬ。そのようなことをする存在になるには、武装しなくてはならない。この主人公はオーデコロンで武装するのだ、ということがよく伝わってきた。
読者候補補作	予後の身にずしりと重き今年米	田村 紀子	*霧に罹悪し、入退院を繰り返している母。今秋、退院した時に友達が届けてくれた今年米を胸に抱いた瞬間、ずしりと重さを身全体で感じた。と同時に生まれているんだ！ という生命力がシシシとみなぎってきた瞬間だったと思います。来年も、再来年も新米を胸に抱いてほしいと心から祈ります。妹と私二人の娘の願いです。
読者候補補作	大きめの制服の群れ山笑ふ	渡辺郁子	*指先が隠れるほど大きな学ランを着せられた仔盛り師の中学一年生。「群れ」と表現したこと、まるで空を行き交う鳥の団に見えてくる。少年たちを優しく包む豊かな田園風景がそこにある。
読者候補補作	満月や両手に光掬いたし（点字）	渡辺早智子	*目のご不自由な方の作品。視覚が不自由でも、聴覚や触覚は誰にも負けないとの自覚がある。満月を愛でる人たちの手の中に、自分の中で満月を堪能している。できることなら心の扉に輝く満月の光りをいっその両手で掬ってみたいものだ、心ははやる。逆境に負けず力強く生きていく。
読者候補補作	玉砕を辞書で引く子の終戦忌	土山フミ子	*玉砕が日常的な言葉として使われている世代と辞書で引く必要のある世代間のギャップを感じ、平和な世の中にならんと思われる句でした。
読者候補補作	とこしへに積もることなし海の雪	藤井孝弘	*普段は「積もる」という状況を目の当たりすることによって、雪が降った（降っている）ことを認識するが、確かに、海に降る雪は、海に溶け込んでしまっ、決して積もることはない。言われてみると「なるほど」と納得の一句である。
読者候補補作	一匙の新酒看取りの枕辺に	藤井香子	*看取りという悲しくも哀しい場面と新酒の取り合わせが見事。永遠の訣を既に覚悟した潔さに新酒の仄かな香りが溶け合い死を美しく昇華させた。
読者候補補作	グラマの悲しい知らせり花の花	藤本花をり	*外国にいらっしやるおばあ様の姿を想像できました。おそらく診察が届いたのでしょうか、不思議と悲しむる句にならず、おばあ様とたくさの思い出を「リタの花」でうまく表現していると思います。おばあ様の好きな花でお慰めしていたかもしれませぬ。あるいは、おばあ様のおいがリタの花の香だったのかもしれない。時間や距離のスケールの大きな句と認めました。
読者候補補作	レシートに武器のお値段水鉄砲	内野 悠	*「武器」で、えっ？ と驚き、値段でなく「お値段」で、あぁ？ っ、感わる「水鉄砲」と着地するほど！ と納得する。そう言えば、アニメや、おもちゃでも、子供が「武器」という言葉を口にします。水鉄砲のレシートの「武器」という文字にハッとさせられた作者。きっと八月の句だと思いました。終戦記念日と関係ないのですが、その季語を使っていないのが、見事だと思いました。
読者候補補作	何もかも捨てれば身軽赤とんぼ	八木 茂樹子	*今のコロナの時期にいろいろとしがらみがある中で、身軽とは、ということについて考えさせられた。
読者候補補作	保育所の鞆箱ひくし日脚伸ぶ	半田貴子	*幸福が近くなり、もともと低い鞆箱が背丈の伸びた子供にはことさら低く感じられる。「日脚伸ぶ」にもうすぐ小学校に上がるのだという期待感をもたせている。小学校には高い鞆箱が待ち構えていることはこの際考えないでおこう。
読者候補補作	子の何故は未来の宝文化の日	板敷清光	*キラキラした目で聞いている。怒りの目で聞いている。子供に真実をはぐらかす言動は通用しないかと常々感じている。
読者候補補作	夕立や土の匂いの雨の音	栗木良一	*夕立の後の土の匂いが響いて来た時の生温かい感じがよく出ている。
読者候補補作	八月の耳よミュートをオフにせよ	百田 登枝枝	*八月になれば新聞でもテレビでも広島、長崎の原爆や戦争の特集のない年はありませんが、SNSの発達とともに、興味のないことは耳に入ることない環境に身を置くこともできるようになりました。そんな状況を作者は「ミュート」と表現し、大切なことはしっかりと耳を傾けようと呼びかけています。八月という重いテーマを選んだ決断、そしてカタカナのミュート、オフという軽やかな言葉を選んだバランス感覚に脱帽です。
読者候補補作	最後とは思はず母と庭火花	富田栄子	*私の母は亡くなったのが冬でしたが、隣りにカラーが食べたという母を背せて病院へ行ったとき入院となり、あっけない夢に終わった母への思い出があります。私にとっては共感を呼ぶ俳句です。
読者候補補作	ねじ巻けば飛び立ちさうな兜虫	武藤 圭明	*きっと玩具の兜虫でしょう、願望を俳句にしたのでしょう、楽しい俳句ですね。
読者候補補作	喪主の座をおりて帯解く夜の秋	福田 達	*夏の終わる頃、ごく親しい人を亡くされた方の心情を詠んだ一句。「帯解く」には、素直な書きを緩和する動作とともに、「喪主」の責任を終えた安堵感も表現されており、「夜の秋」が非常に効果的であると感じられる。
読者候補補作	草刈の男まさりを匂はせる	豊田義久	*若い女性ならまだしも、60代の女性が草刈りをする姿を田んぼや畑でよく見かける。日本文化強し。
読者候補補作	あの世から飛び火のやうな曼珠沙華	北村純一	*いつも同じ場所に生える彼岸花は、時期になるといつともワクワクする。秋風に吹くあの赤さは、あの世のものかもしれない。
読者候補補作	母の日の母でいること難かしく	北邑あふみ	*母の日の母ってどんなお母さん？ 思い浮かんだのは、子供から慕われる、優しくして大らかな、理想のお母さんです。でも実際は母の日といえども子供を叱ったりバタバタと掃除をしたり、お母さんは大変で、なかなか一日中ここにこしているわけにはいかないですね。とてもありそうな、でも誰も描いたことのない母の日の一面面を取り上げ、しかも具体的に描かないことで読者に立ち止まって考えさせる様、素晴らしいと思いました。
読者候補補作	生涯を一塗装工齋雲	堀尾英王	*屋根や壁に相対する塗装工のひたむきな情熱が浮かんでくる。作者は作家の合間に空を見上げ、齋雲を認めることが幾度もあったにちがいない。その雲ひとつひとつが塗装工の勤続年数を象徴しているように思えた。たいへん良い句だと思った。
読者候補補作	セーターを抜けて八十路の息を継ぐ	椋本望生	*「抜けて」がよい。八十路の「路」があることでもってセーターから首を出すのに八十路掛ったかのようなおかしみと、それまでの人生の歩みをおぼされる。いや、年を取ればそれまで当たり前のようにならなくなってきたのが現実なことは当然であろう。タールネック、とっくのセーターなら尚更だ。「息を継ぐ」という多少大げさにも思える措辞にセーターを着たぞ、着てやっただぞ、という充実、高揚を感じる。きつとお気に入りのセーターなのだろう。
読者候補補作	夏空に好きと落書して逃げる	野口郁子	*大きく広がる「夏空に好きと落書して」、ときどき最後の、「逃げる」にクスクス笑ってしまう。かわいいな初々しい青春だなとニヤニヤして居残ったくなる。ベタといえばベタ、王道といえば王道な、漫画のような展開にドキドキハラハラして見守りたい気分。

読者賞候補作	弦月やひとり老いゆくニュートウン	野上 卓	*はっきりとしたニュートウンの景がうかびました。満月であっても三日月であっても風景を浮かべることはできますが、半分は輝き半分は影である弦月を使い、読み手にいろいろな対比を想像させることで深みのある句になっていると感じました。
読者賞候補作	老猫の寝息たしかむ冬ひなた	裏野 四郎	*猫も家族の一員。大事にされているんですね。やさしい家族愛のすがたが見えます。
読者賞候補作	もういいよ言い切る母の秋深し	林 洋子	*病気のだろうか、孤独に苛まれているのだろうか。慰めようとしても、断る母親は全てを受け入れたのだろう。子どもも辛い。
読者賞候補作	捕虫網かぶりで虫の気持の子	鈴木 沙恵子	*子供がふざけて、網をかぶっているのをよく見かけます。網をかぶることで、捕らえられた虫の気持がわかるというのは、面白い発見だと思います。
読者賞候補作	アクリル板隔て逢瀬のソーダ水	鈴木 経彦	*まさに、と強く共感した一句
読者賞候補作	宇宙旅行ガイドに付箋夏休み	浪岡 玄	*どこにも行けない夏休み。ステイホームから生まれた広い宇宙への憧れ。宇宙旅行が普通に催行される日も遠くない。宇宙ガイドブックにわくわくしながら付箋を貼っている子に、こちらもわくわくさせられる一句。
読者賞候補作	はまなすや海うらまざるにくまざる	和泉 道雄	*海でどなたかを事故で亡くされたのでしょうか。ようやく海岸までやってきたらはまなすが咲いていた。それを見て海は憎むものでも恨むものでもないということに気が付いたということでしょうか。とても切ない句だと思います。
読者賞候補作	田植女や足を抜きつつ足を入れ	廣見 知子	*田植えをした事のある人なら誰でも感じる事だろう。泥の中から足を抜くのも足を入れるのも一言労なのだ。田植女の過酷さを実感させる一句となっている。
読者賞候補作	しめり灰かけて囲炉裏を鎮めけり	藤尾 三枝子	*もう眠りにつくためだろうか。囲炉裏の火を落とすために濡った灰をかき除ける動作が映像として目に浮かびあがる。火の神に対する恐れ、あるいは敬意から出た言葉だろうか、その動作を下五で「鎮めけり」と表現したことに敬服してしまう。
読者賞候補作	せり鍋や雪のほひのする言葉	まんぶく	*序は春の七草、雪は冬と二つの季節が詠まれています。これはちょうど季節の変わり目ではないかと思いました。家族または友人たちとせり鍋を囲みながら、身体は温まりながらも、外では雪がちらついているのかも知れません。誰かが雪とつぶやいた一言を雪の匂いがすると、中七下五で表現したのではないかと思います。これも大好きな一句です。 <選者/夏井いつき評> 「せり鍋や」という詠嘆からの展開が素敵。「雪」の語で春雪の水辺に香る芹が一瞬浮かび、「雪のほひ」に視界が喜び、「言葉」という着地に清涼の気が満ちてゆく。
読者賞候補作	関節で繋がるからだ盆をどり	伊藤 朝香	*からだってものは、関節で繋がっているんだなあということ、自分が盆踊りで踊っているときに、ふいに気づいたのが、それとも踊っている人を見て、感じたのか。どちらにせよ、作者が盆踊りの現場で、からだで関節で繋がっている、からだになってるんだな！ おお！ と、私も一緒に驚いた。使われた言葉にはちょっとも風情なんかないのに、素直に気持ちを平素な言葉で綴ることで私にもその気持ちが伝わってきて、ほんとだねえ、不思議だねえと私も感じた。 <選者/小川経舟評> 確かに人間の体は関節で繋がっているが、盆踊の最中にそのことを思うのがユーモラスだ。自分も含めてまるで踊り人形が輪になって踊っているように見えてくる。
読者賞候補作	初御空盲導犬と第一歩(点字)	安達 靖子	*一つの年が無事に過ぎ、今新しい年が始まった。明けはじめた空を見上げた時、作者は「さあ、行くぞ」という気概を持ったに違いない。そして、一心同体のついでに目も添ってくれる盲導犬もその一歩を踏み出してくれた。作者の盲導犬に対する愛情とお互いの信頼関係を句の中に見ることが出来る。
読者賞候補作	妻は旅へ俺は草餅喰つてゐる	岡本 信行	*とてもユーモラスな句だと思った。草餅ではないにせよ、似たような体験をした人は多いのではなかろうか。私はこの句を読んで、妻が旅行へ出かけるたびに父が焼肉屋へ連れて行ってくれたのをすくすく思い出した。面白くて普遍性がある良い句。
読者賞候補作	夕端居母は真水のやうにをり	関戸 信治	*大正生まれの母は米国よりの帰国子女で定年退職後、徐々に言葉も身体もまろくなってゆくことに嬉しくもあり悲しくもあった・・・そんな母を思い出させてくれた一句です。
読者賞候補作	父の日の父の寝顔を見ておりぬ	桑原 淑子	*父の寝顔を見て安堵する優しい作者の気持ちが伝わってくる
読者賞候補作	玉葱の淋しき夜を徹塵にす	小池 令香	*玉葱を徹塵にして自分の鬱憤を晴らしている様子。光景が目につく。心の様子が実感として伝わってきます。 <選者/正木ゆづり評> 散文ならば「涙の夜に、玉葱を徹塵切りにする」というだけのこと。語順や助詞を入れ替えると、こんな不思議な句に。それでいて、玉葱の存在感も、人の寂しさも描かれている。
読者賞候補作	まづ耳がこちらを向いて子鹿かな	新井 久実	*鹿に限らず耳の発達した多くの動物は、周囲の異変を感じるのには音によるという。まず音のする方へ耳だけを向け、方向を探ってから、顔をそちらに向け、今度は目で確かめる。危険を察知すれば逃げようとし、何事もなければ悠然としている。そんな野性的な本能を小鹿も発揮しているのだろう。作者は見たままを詠んだ。「まづ」の語で、そのあとの動作が想像される、省略の効いた佳句。
読者賞候補作	逝く時は夢みるやうに昼寝して	森 知名恵	*この句を選んだ理由は単純に「自分もそう思うから」だ。そう思うのは私だけではないだろう。真夜中の幽霊に飲まねがら逝くよりも、優しい太陽の日差しに包まれながら、夢を見るように逝きたい。そんな作者の願いは私を感じ取り、そして共感した。
読者賞候補作	ジェットコースター今天辺に夏来る	多岐 司馬	*ジェットコースターがゆっくりと頂上上がった瞬間をとらえ、天辺という言葉でこれから始まる興奮と躍動感を想起させます。そしてその後には詠く語が「夏来る」。ジェットコースターに乗ったのは夏の初めだったので、でもそれだけにとどまらず、これから始まる季節が瑞々しく輝かしい、チャレンジと冒険の日々となることまで期待させてくれます。
読者賞候補作	雪解けに磨かれてゐる村ひとつ	谷口 好	*雪が降って凍れていると雪解けが起ころ。それは日のひかりとともにまるで村が磨かれているような日本の原風景とも言うべき情景が実に巧みに描かれている。
読者賞候補作	教室のランドセルより蟬の声	中島 五郎	*元氣よく教室に入ってきたと思ったらランドセルから何やら蟬の鳴き声が聞こえる。初めは意図に蟬が来て鳴いていると思いきや実は実は内緒で蟬を捕まえて来ていたのです。
読者賞候補作	草踏めばとびつく露と逃げる露	長谷川千鶴子	*露の草原に足を入るとズボンがびしょりになると同時に、露が飛び散ってバッグやコートも濡れる。その様子をどびつく露と逃げる露と表現したのは見事である。 <選者/夏井いつき評> 草を踏む時は、いつもぐしょりと濡れる。飛びついてくる露は露を、逃げる露は靴を濡らす。草と露を詠んだ句は多々あるが、「露」の明るい躍動感が描かれて心地よい。
読者賞候補作	どこからが水どこからが薄氷	本間 清	*冬目に池や水盤に薄い氷が張っているのは見たこともあるし、知っているけれど、それを「どこからが水で、どこからが薄氷なんだらうねえ」と詠んでくれることで、私の眼前にぱっと情景が浮かぶ。「ほんとにねえ、どうなるんだらうねえ」と作者と一緒に池をのぞき込んでいるような気になる。時間と空間を超えて、作者とともにいて、一緒に笑いながら池を見ているような感覚になった。楽しい。
読者賞候補作	月青く沈めて柱状節理かな	野村 生子	*月の青い光が照らす柱状節理。美しい光景である。月は高い位置にある方が青く見えるので、この「沈めて」は逆説的に、青く見えたことから火山灰で月が青く見える現象、火山灰に沈む、噴火当時の様子を幻想したのかも知れない。或いは柱状節理を見て当時月を青く沈めた様子思ったか。句末の「かな」からすると後者か。 <選者/夏井いつき評> 柱状節理とは、マグマが冷える際に生じる六角柱状の割れ目。なじみ難い科学用語を、季節「月」と「青く沈めて」という描写で詩にした。「かな」の詠嘆も静かに深く。
読者賞候補作	原爆忌茄子に空の映りある	鈴木 大三郎	*この句に存在しているのは、空を映した立派な茄子だけのものだ。ただ、茄子が今日の日の空を映している。空が映りこむほどの立派な大きい茄子なのだろう。そんな茄子を手に、そう今日は原爆忌だったのかと、ぼんやりと思いつく。そんな「日常」、なんて平穏な日常なのだ。平穏な日常を、コソコソと重たからその今日の茄子の輝きであり、空なのだろう。平穏な日常とは、この手にある茄子と同じく一日では作れないものだ。
読者賞候補作	星流る生きとし生けるもの変異	鷲津 誠次	*一眺み飛ばしそうになる「生きとし生けるもの」というありふれた措詞の後に置かれてある「変異」に目を留った。なるほど、ではあるけれど「生きとし生けるもの」同様ありふれた、至極普通に存在している変異たち。作者も読者である私たちもそんなものである。また、名もなき流星も地球もまたひとつの変異であろう。自分とは違う者たちへの眼差しとあり方に共感する。
読者賞候補作	己が影地に凝(かたま)りて広島忌	中島 淳	*広島への原爆投下で過去ではなく、今に読んでいるのだと感じさせられた。
読者賞候補作	薄氷や鳩は素足で餌を探す	斎藤 加洋	*薄氷、と素足と言う表現がゆさど冷たさを際立たせていて生き生きとした感じが伝わる。
読者賞候補作	仕舞湯のへそに寄きて冬至柚子	佐藤 雅之	*仕舞で遅く帰ったのか、仕舞湯を楽しんでいる男の姿が浮かぶ。折しも冬至、浮かぶ柚子がなつようにへそに寄ってきて、男は少し笑う。あたたかな雰囲気も好ましい。
読者賞候補作	枯れ色の料紙のままで雛納め	西川 文子	*一体ずつ雛を包む料紙も、雛たちと同じように月日を重ねてきたのだろう。新しい料紙に変えて包んでもよいのに、そうはせず、丁寧に包んでいく。雛たちと過ごした祖母や母たちの月日も、ともに包み込むように。
読者賞候補作	寒暄や乳搾る手へ乳の湯気	いさな 歌鈴	*「や」の切れで、手に堪える朝の寒さを感じました。そんな中での搾乳。手より上りくる湯気の体温止めの着地も、情景がありありと浮かんで見事です。